

黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.77 (March 31, 2014)

第77号 2014年3月31日

例会発表要旨

10月例会 2013年10月26日 立命館大学桓心館

トウェインの未発表原稿“*The Man with Negro Blood*”を起点として

風呂本 惇子

この未完の小説の粗描は、Arthur G. Pettit が “*The Black and White Curse: Pudd'nhead Wilson and Miscegenation*”(1974)にまるごと引用し、また Shelley Fisher Fishkin も “*False Starts, Fragments and Fumbles: Mark Twain's Unpublished Writing on Race*”(1991)で要約の形で紹介し、1883年から89年の間に構想されたと推定している。この中に、北部でパスする元奴隷の主人公が、爪を隠すために「いつも手袋をする」設定がある。Werner Sollors は *Neither Black Nor White Yet Both*(1997)において、19世紀半ばから20世紀半ばに出版された混血をテーマに含む欧米の小説でしばしば言及された「爪の特徴」について、その描き方の実態と、言及が「風説」の領域に退き、やがて消えてゆくまでの流れをたどっている。ソラーズによれば、文学作品に「爪の特徴」を最初にもちこんだヴィクトル・ユーゴーの『ビュグ＝ジャルガル』(1826)以来、爪の特徴への言及は直接の描写よりも読者の知識を前提とする例が多かった。トウェインの未発表原稿の場合もそうであり、彼がその時点では言い伝えを受け入れていたことを示す。しかし彼は『まぬけのウィルソン』(1894)に、「あの子の黒人の血は、爪にも現れないほどわずかなのに・・・」(14章)というロクシーの呟きを挿入し、爪の特徴の有無では人種を識別できないとする方向へ踏み出した。20世紀になるとこうした立場をとる作品が増えてゆく。1932年には296人の黒人の爪を調べた生理学学者モナシュが、言い伝えは「真実ではない」と言明。優生学のゴールトンが指紋の研究の当初、人種の識別を可能にする生物学的証拠を求めていたのと同様に、爪へのこだわりも人種の区分が執拗に要求されていた時代に生み出された特有の現象であり、時代の変化とともに消えていったことが証かされている。

① 戦後の日本人作家の描いた黒人男性表象と家族像の問題

時里 祐子

本発表では、まず、1985年に出版された山田詠美の『ベッドタイム アイズ』をめぐる国内、および海外からの批評、批判を分析し、そこから、これまでの日本人作家による黒人表象と、それらに対する批評や研究の動向に焦点を当て、現代の山田詠美作品にいたる日本人女性作家が描く、黒人男性との家族構築の物語が不可視化された背景を検証した。アメリカからの研究は現在まで、日本での黒人ステロタイプ化に対する批判、日本社会の変遷を背景とした他者像の分析、そして占領にまつわる影響、80年代以降のバブル期における黒人像の商品化、などがなされているが、そのうちで、肉体文学としての女性文学や、家庭小説に顕れる黒人男性像を精緻に分析したものはほとんど存在しない。その背景には、日本人女性の戦後体験の「記憶」を、「占領者＝他者」としての黒人とのセクシュアルな関わりに限定し、家族として一つの共同体を形成していく過程を不可視化してしまう批評傾向が存在している。このような占領をめぐる言説を通して、女性という存在がすでにセクシュアルな客体として他者化されたままである日本の社会的、文化的傾向を指摘した。

② 「仮住まいの場としてのコミュニオン

ー SOV 派ラスタファリアンの生活とその変化」

神本 秀爾

本発表は、1998年に結成された、ジャマイカのラスタファラーライの一宗派スクール・オブ・ヴィジョン(SOV)派を対象とした、2008年から2009年にかけてのフィールドワークの成果にもとづいている。本発表では、同派の質的な変化を、「最後の審判」への期待の高まったエチオピア暦のミレニウム(7年遅れ)の前後で比較し、その変化をラスタファラーライの文脈に位置づけて考察した。

発表者は、一次資料にもとづき、SOV 派のコミュニオンは「最後の審判」までの仮住まいの場として人びとを魅了していたが、ミレニウムを経て、「日常生活の場」としての側面が強くなっていき、信徒数は減少傾向に向かったことを示した。そのうえで、このような変化をラスタファラーライの変容と継続にアクセントを与える出来事ととらえる視点を提示した。というのも、信徒の多くは、SOV 派との出会いを通じて、ラスタファラーライに目覚めていたが、コミュニオンから離脱することで、ラスタであることをやめたものもほとんどいないためである。司祭を中心とした人びとが、SOV の活動を通して、多くの人びとに贖罪と救済の夢を見せたのは事実であるが、長い目で見ると、SOV 信徒になるために受ける洗礼は、人びとをラスタファラーライに忠誠を誓わせることはできても、宗派に忠誠を誓わせる拘束力をそなえてはいなかったのである。つまり、SOV 信徒は、洗礼を通じて、SOV を介することなく、その背後にあるラスタファラーライの太い水脈や、SOV 以外のさまざまな支流と出会うきっかけも同時に得て

いたのである。

わずかな間に国内外双方における有名宗派のひとつとなり、縮小していった SOV の事例は、このような集合と離散がラストファーストを活性化させ続けているということを示している。

12月例会 2013年12月14日 明治学院大学横浜キャンパス

① オーガスト・ウィルソンのブルース戦略の問題点

伊勢村 定雄

オーガスト・ウィルソンは、芝居を書くに際して、4 Bs、即ちブルース、ベアデン、ベシー・スミス、ボルヘスに恩恵を受けていると発言している。とりわけ特にブルースは作品中にテーマとしてだけでなく、実際の作中歌の形で取り込まれ、重要な役割を果たしているものもある。一方で、ウィルソンの全作品を通して見ると、途中からアフリカ系アメリカ人の救済的存在であるアーク・エスターなる女性が登場し、彼の作風に変化をもたらし、かたやそのブルース一辺倒の特長は後退しているように思われる。この発表では、このブルースとオーガスト・ウィルソンの作風の変化がどう関わり、その後の展開に与えた理由を考察するために、彼がそのブルースを最も利用して書いたであろう初期の『マ・レーニーズ・ブラック・ボトム』と後期のはしりとなる『セブン・ギターズ』という2作品を取り上げ、ブルーステイン氏との論争に至った経緯を引きながら、そのブルース戦略の問題点を検証した。

② Overcoming Race: Japanese and Black American Globalism

Ben Karp

My talk to the Japan Black Studies Association concerned the racially defined modernity negotiated by both black Americans and Japanese people in the pre-Pacific War twentieth century. Using propaganda images from the Russo-Japanese War which portrayed Japanese soldiers with skin as white as their Russian enemies, and images of equally white skin contrasted to pitch black natives from a popular Japanese comic book of the 1930's, I tried to capture the malleability of race in Japan as it was suitable to the new global power's claim to the cultural privileges of modernity.

The Japanese novelist, Junichiro Tanizaki and the American scholar W.E.B. Dubois, are, in surprisingly similar ways, interesting examples of early twentieth century responses to the imposition of a modernity that carried with it strong racial associations; namely, the idea that modernity was a category experienced naturally by white and Western society, but unnatural to the vast majority of the earth's surface and people. There are of course differing particulars, but my talk tried to stress the similarities of conclusion and execution in the thinking of these two outstanding individuals, and the peoples they tried to represent.

I suggested that neither scholar in their roughly contemporaneous careers entirely rejected, inverted or even tried to fully subvert the structure of racialized modernity, but rather struggled to make this category compatible with their own moral and intellectual needs. Lastly, I tried to demonstrate that both men saw the clash of East and West, old and new, white and non-white, primarily in aesthetic terms.

I call the racial positioning towards the middle “mulattitude,” since in fact both men alluded to their own personal and cultural hybridity, and both men reference a schema framed by darkness and lightness, and finally both writers saw Japan in particular as occupying a special interstitial place between the West and Asia by being both and neither.

On the one hand, it might be surprising to find mutual resonances in such seemingly different worlds. Japan was aspiring to a kind of power within its grasp that black nationalists and globalists in America could only dream about. Yet, following the work of Harry Haratoonian, if we see these well thought-out strategies on both sides of the Pacific as the pursuit of a kind of coeval modernity, it makes sense that the self proclaimed representatives of the two groups most interested in the color spectrum, would rise to the occasion of its confronting in similar fashions.

My intention, however, is not to gloss the differences between two idiosyncratic writers. Du Bois’s work is filled with genuine and perhaps over-compensatory racial pride. Tanizaki, however, struggled with what he felt to be the reality of Japanese ugliness and inferiority, believing for example that cinema proved that the Western face was superior in beauty to that of the Japanese. Tanizaki echoed the famed author Natsume Soseki, who once noted after spotting his own reflection: “We are country-bred hicks, wild nincompooop monkeys, dwarf, earth-colored bizarre people.”

Though by no means a complete representation of black and Japanese responses to modernity, Du Bois and Tanizaki represent a powerful example of how non-white intellectuals struggled under the conflation of modernity with whiteness. This claim embedded in the idea of modernity, as well as the flexibility of identity between white and black employed in its resistance, remain areas worthy of exploration, especially as contrasted in contemporaneous black America and Japan.

2月例会 2014年2月22日 立命館大学桓心館

① 境界を越えて： トニ・モリソンの作品における自然と場所
— 環境批評の視点から

小泉 泉

1990年代以降顕在化してきた環境批評は、伝統的な西洋思想と理論が、人間中心主義的な世界観と二元論的な概念を含むのに対し、全体主義（地球中心）的な世界観へ移行しようとする意図を基本とする。本発表では、トニ・モリスンの作品、特に *Tar Baby*、*A Mercy*、*Home* において示される「自然」と「場所」の意義について、環境批評の視点から考察していく。*Tar Baby* において、モリスンは、自然や生物（たち）の心象描写を用いて、それらの眼前に広がるより広大な現実世界を描きながら、人間が定める領域分断の修正を求めているようにみえる。自然と人間の「コミュニティ」の調和と、地球上全ての諸要素のネゴシエーションを促すものである。*A Mercy* には、環境批評のキーコンセプトとなる「場所の感覚」が顕著に示されている。場所が人間（のアイデンティティ）を形成していく、という感覚は、ホミ・バーバのポストコロニアル的な「故郷喪失」(unhomely) すなわち「故郷と断絶した生」がホームを再定する感覚と結びつく。アメリカインディアンのリナの「場所性」と空間・時間認識を通して、二元論的な思想を融解させる新しい方向性を見ることが出来る。*Home* において、特に、Cee に起こる一連の出来事を通して、「人間も自然の一部」という環境批評の概念が提示されている。Dr. Beauregard の Cee の身体を傷つける行為は、フロイトの「不気味なもの」の概念と結びつき、「ホーム」「母の子宮」しいては「母なる大地」へと繋がっていく。自己を取り戻し、「ホーム」に根を張って生きるためには、「母なる大地」への回帰が必要となる。これらの概念の考察を通して、モリスンの言語が、いかに、自然と精神のネゴシエーションを通して、従来築かれてきた「境界」を揺るがし、それを越えた世界の可能性に向けられているかについて示す。

② アフリカ系アメリカ人スポーツ史概観と、テッド・コービットと アフリカ系アメリカ人長距離走者の歴史

森川 鈴子

本発表は、アフリカ系アメリカ人研究の中でも軽視されがちなスポーツ史、スポーツ社会学などの研究分野を概説した後、現在執筆中である、アフリカ系アメリカ人長距離走者の歴史に関する拙著の内容を、アフリカ系アメリカ人のスポーツ史概論と共に紹介した。アフリカ系アメリカ人のスポーツへの貢献は、アメリカの社会的地位の向上を促進するのか、そしてアメリカ社会におけるアフリカ系アメリカ人のアイデンティティーや、社会統合もしくはナショナリズム的な政治思想へ影響を与えるものか、という研究課題を提示した。さらに、こうしてアフリカ系アメリカ人長距離走者による活躍に注目してみれば、短距離走者がアフリカ系アメリカ人走者の中で、アフリカ系アメリカ人が持久力よりも瞬発力に秀でているという一般的によく知られている生物学的な根拠、先天的な差をめぐる「人種」という概念をめぐる論議を打ち砕く重要な視点になると論じた。最後に、「ウルトラマラソンの父」として仰がれ、ニューヨークを活動拠点としていた、全米ロードランナークラブの前会長、テッド・コービットの功績を紹介しつつ、21世紀のマラソン流行に沿って、アフリカ系アメリカ人のスポーツや教育、健康維持に対する意識と向上へのコービット氏の貢献などについて論じた。

会員からの投稿

2013 年度英国カリブ学会報告書

井上 正子

2013 年 7 月 3 日から 5 日にかけて、第 37 回英国カリビアン・スタディーズ学会年次大会 (38th Annual Conference of the Society for Caribbean Studies) が、ウォーリック大学で開催された。詩人デイヴィッド・ラビディーンが教鞭を執ることで知られるカリブ文化研究センター所長ニール・ラザルス教授による開会の辞で幕を開けた大会の内容は、実に多様であった¹。「エコロジーとカリブ」という一応のテーマが設定されていたものの、文学・文化、教育、心理学、地理学、政治、経済、歴史と幅広い分野からの応募があり、英国、米国、オランダ、オーストリア、イタリア、フランス、スリナム、バルバドス、ジャマイカ、マルチニク等からたくさんの研究者が集った。『征服の修辞学: ヨーロッパとカリブ海先住民 1492-1797 年』(Colonial Encounters: Europe and the Native Caribbean 1492-1797, 1986) の著者エセックス大学のピーター・ヒューム教授、同大学の比較文学者でウォルコット研究者のマリア・クリスティナ・フマガリ教授、リーズ・メトロポリタン大学の講師でマルチニクの作家ジョゼフ・ゾベルの孫でもあるエミリー・ゾベル、フロリダ大学の比較文学者でポストコロニアル文学研究者のリー・ローゼンバーグ教授等がパネリストとして名を連ねていた。

初日は「カリブ表象」のパネルで、ローゼンバーグ教授の発表「『陽の当たる島』とポストウォー・パラダイスとしての西インド諸島の構築」(‘Island in the Sun’ and the construction of the West Indies as a post-war paradise) を聴講した。ローゼンバーグ教授によれば、北米、特にアメリカ合衆国の中産階級の人びとがカリブ諸島を「観光客にとって楽園である熱帯の島々」とはつきり認識するようになったのは 1950 年代のことである。彼らはこの時期、文明の利器を捨てずに現代生活から逃避できるお手軽空間として、カリブ海諸島を見なすようになった。贅沢ではあるが手が届く範囲であり、「島の音楽」や清潔なビーチ、気の利く黒人給士、北米では許されない相手とのアバンチュールを可能にするカリブの島々。プロデューサーのダリル・ザナックが監督・脚本に左翼系のロバート・ロッセンと、アルフレッド・ヘイズを起用し大ヒットさせたアレック・ウォー原作「陽の当たる島」(Island in the Sun, 1957) は、まさにこの時代の産物である²。大英帝国の栄光をたたえる植民地言説が散りばめられたウォーの原作がシナリオに書き換えられていく過程を紐解きながら、ローゼンバーグ教授はこの映画が公民権運動や反植民地運動の盛り上がり、アングロ・アメリカン中心的な政治経済政策という環大西洋世界における相反する社会情勢の産物だったと指摘する。実際この映画には、原作の帝国主義的言説と、母国では許されない火遊びにはぴったりの「トロピカル・アイランド」という観光産業が作り上げた言説が織り込まれると

¹ラザルス教授はこのスピーチで 2011 年出版の著作『ポストコロニアル的無意識』(Postcolonial Unconsciousness) を踏まえながら「世界文学としてのカリブ文学を研究する」とは「世界システムにおける流通や受容、経済的発展の不均衡をも研究することだ」と述べ、ポストコロニアル文学研究のひとつの方向性を提案した。

²アレック・ウォーは作家イーヴリン・ウォーの兄。

同時に、ザヌックによるアメリカ的人種主義、とりわけ異人種婚というタブーへの挑戦が反映されている。情熱的かつ政治的なヒーローとしてハリー・ベラフォンテが起用されていることが、それを雄弁に語る。公民権運動の活動家で「USA フォー・アフリカ」の提唱者としても知られるベラフォンテは、アフリカ系としてブラウン管に登場した最初の二枚目俳優で、キング・オブ・カリブソとしての顔も持つ。しかし映画では、北米白人男性の植民地主義的かつ性的まなざしの対象としてのカリブ女性の延長上に、褐色の肌をしたジャマイカ生まれのベラフォンテが配置されることで、主義主張が革新的であるにもかかわらず植民地のステレオタイプ—エロスと情熱の島なる言説—が再生産され、意図したメッセージが覆い隠されてしまう。

必死にメモを取りながら「カリブ表象」の聴講を終え、ひと息つくため会場の外に出る。用意されているお茶とお菓子をいただいていると、アジア系の女性を発見。思わず声をお掛けすると、スリナムの芸術家で本年度のブリジッド・ジョーンズ賞の受賞者キット・リン・ジョン・ピアン・ジ (Kit Ling Tjon Pian Gi) 氏であった。この賞は、カリブ研究者であった故ブリジッド・ジョーンズ博士への敬意を表して設立されたもので、2010年にはジャマイカ出身の作家アーナ・ブロードバーが受賞しているという。そのような著名な方とはつゆ知らず、無謀にも声をかけてしまった私に、ピアン・ジ氏は穏やかな口調で旧オランダ領スリナムの中国系二世という自身の出自やご家族のこと、カリブ海諸島を中心に個展やワークショップなど幅広い活動を続けていることを話してくださった。二日目の講演では、周縁的で複数の文化をわが身に受け継ぐアーティストとしての生き方と作品について語り、中国、スリナム、ヨーロッパの舞踏伝統の混淆パフォーマンスを披露し会場を沸かせた³。

休憩時間が終わると楽しみにしていたパネル「ウォルター・アドルフ・ロバーツと帝国の越境」(Walter Adolphe Roberts and Imperial Border Crossing) である。ウォルター・アドルフ・ロバーツは、20世紀前半から50年代にかけてジャーナリスト、編集者、作家、ジャマイカ独立運動の指導者として活躍した白人クレオールであり、研究の余地が多いとして近年話題の作家である。パネリストのひとりであるブランデイル大学のフェイス・スミス教授は、ロバーツの小説『シングル・スター』(The Single Star, 1949) に描かれる反植民地革命が、私たちが今日考えている英語圏カリブにおける政治的文化的ナショナリズムとはまったく異質なものであることを、ジャマイカのプランター階級の表象を中心に分析した。ピーター・ヒューム教授は、『シングル・スター』におけるパラレリズムについて言及し、1949年の独立の気運高まるジャマイカと19世紀末のキューバとは多くの点で接点があると指摘した。主人公スティーン・ロイドは、ジャマイカから独立戦争に参加するためキューバに向かい、そこで反乱軍指揮官カリスト・ガルシアや米国義勇騎兵隊大佐セオドア・ルーズベルトに会っている。ヒューム教授の調査によれば、ロバーツのキューバとの関わりは、キングストン湾にスペイン艦隊が停泊しているのを目撃した1898年にさかのぼる。その後、1904年には米国に移住し活動の中心はニューヨークになるが、ホセ・マルティへの個人的関心が高まる1930年代にはバハマに足繁く訪れるようになり、40年代後半には『シングル・スター』の執筆調査をバハマで行っていたという。

ヒューム教授は、主人公ロイドがカリブの島々を囲む海、特にキューバの東側、ジ

³ブリジッド・ジョーンズ賞の詳細については、Bridget Jones Award for Caribbean Studies, <http://www.caribbeanstudies.org.uk/bursariesPrizes/bJones.htm> を参照のこと。

ジャマイカ、ハイチまで長く伸びた水域を「カリブ海」ではなく「ジャマイカ海」と呼び、この水域を「われら地域の歴史の源」と認識するカリブ海的な地理感覚に注目する。2012年に出版されたヒューム教授の著書『キューバのワイルドイースト: オリエンツの文学地理』(*Cuba's Wild East: A Literary Geography of Oriente*, 2012)でも指摘されていることだが、『シングル・スター』に繰り返し登場する海によって結ばれた「全体としての島」というイメージは、キューバの思想家アントニオ・ベニテス・ロホが『反復する島』(*The Repeating Island*, 1992)で理論化したものに近い。ベニテス・ロホは、本書でドゥルーズ＝ガタリが提示した機械論をカリブ社会の考察に応用させたが、ベニテス・ロホにとってカリブ海は、歴史-経済的に重要な場であり、島々は群島のなかのひとつの島として、中心もなく周縁もなく互いにコピーし合い増殖していく。海によって隔てられ、言語、文化の相違にもかかわらず、帝国主義と植民地主義の歴史、およびこれらの経験の集団的記憶によって結びついている。ジャマイカとキューバの関係は、言語的にも文化的にも異なるものの、両国をベニテス・ロホのいう「反復」と見なすことで、ロバーツはアンダソンの言う「想像の共同体」とは異なるオルタナティブなコミュニティを想起している。そうすることでロバーツは、指導者として関わる現在進行形のジャマイカ独立運動と19世紀末のキューバ独立運動の歴史に、ある種のパラレリズムを見だし、それをドラマ化したのである。

ロバーツについては未研究の部分が多いことから、会場からはたくさんの質疑が寄せられたが、いずれのパネリストも謎が多すぎる作家であることを強調していた。例えばニューヨーク時代の活動についてだが、ロバーツは1904年からニューヨークに住み始め、1936年には同じくジャマイカ出身のウィルフレッド・A・ドミンゴらとともにジャマイカの独立支援組織「ジャマイカン・プログレッシブ・リーグ」(*The Jamaican Progressive League*)を設立している⁴。ドミンゴについてはアラン・ロックのアンソロジー『新しい黒人』(*The New Negro*, 1925)にもエッセー「黒い熱帯からの贈り物」("Gift of the Black Tropics")が掲載されており、ハーレム・ルネサンスとの関係は既に知られている。同じくジャマイカ出身のクロード・マッケイも、『ハーレムへの帰還』(*Home to Harlem*, 1928)がベストセラーになるなど、外国生まれであることが忘れられるほど「ハーレム・ルネサンスの作家」という認識が定着している。だがロバーツに関しては、産児制限活動家マーガレット・サンガーやフラッパー詩人エドナ・セント・ヴィンセント・ミレイとの華々しい交際が断片的に知られてはいるものの、アメリカとの関わりについては驚くほど情報が表に出ていないのが現状だ。編集者やジャーナリスト、作家として出版された仕事以外は出版されていないことから、パネリストたちはロバーツ研究の大いなる飛躍を期待するとコメントするにとどまった。私は、個人的にロバーツのルイジアナ三部作に関心があるので、最新の研究動向をチェックしながら引き続き調査したい。

翌日は「合衆国とカリブ関係」(U.S-Caribbean Relations)のパネルを聴講した。ジェノバ大学のアレサンドロ・バデッラ氏はプレゼン「キューバ人およびハイチ人ディアスポラのUS外交政策における役割」(*The role of the Cuban and Haitian diaspora in shaping US foreign policy*)において、キューバ革命以降の米国におけるキューバ系コミ

⁴ジャマイカン・プログレッシブ・リーグについては、以下の論文を参照している。BirteTimm, "Caribbean Leaven in the American Loaf: Wilfred A. Domingo, The Jamaica Progressive League, and The Founding of a Decolonization Movement For Jamaica." *GHI Bulletin Supplement 5* (2008): 81-97.

ユニティと 90 年以降のハイチ系コミュニティへの政策を比較考察した。エセックス大学の講師ジャック・ピーク氏は「クロード・マッケイ：ジャマイカ系アメリカ人作家か？ U.S.-カリビアンコネクション」(Claude McKay: Jamaican American Writer? U.S.-Caribbean Connection) で、マッケイの作品を「カリブと合衆国」の二項対立ではなく、環カリブという両地域の上に再配置することを提案した。ハーレム作家として語られることの多いマッケイだが、ジャマイカ時代には既にクレオール英語詩人として知られた存在であった。しかし、彼の詩の多くは定型詩という制限内でクレオール英語を使用している。これを宗主国の言語文化の単なる内面化とみるか、クレオールの混雑主体の生成とみるかは意見が分かれるところだが、マッケイの方言詩集は話題となり、数年後にはハーレムのベストセラー作家と呼ばれるまでになる。ヒューストン・ベイカーは『モダニズムとハーレム・ルネサンス』(Modernism and the Harlem Renaissance, 1989) の中で、アメリカ黒人とカリブ黒人の共通の記憶、つまり奴隷制の記憶を想像力で再生するため、奴隷や被植民者という与えられた環境で支配側の優位に立とうする場合に弱者が取りうる戦略を「形式の習得」と「習得の変形」という言葉で定式化した。まさにマッケイは宗主国の詩の形式をわが物として習得し、それを足掛かりとして越境作家として成功していくのである。

英国カリブ学会のような学際的な学会に足を運んでみて実感したのは、言葉の重みである。今回のパネルの 8 割が旧英国領カリブを対象とした白人の専門家で構成されており、質疑したくてうずうずしている旧植民地から渡英した聴衆が待ち構えている。手厳しい質問に応答しきれずしどろもどろになる研究者もいる。泣き出しそうになる院生もいる。まさに戦いの場である。

全体としては新しい情報が多くいまだに消化しきれていない部分もあるが、刺激的で有益な時間を過ごすことができた。特に、ピアン・ジ氏とは、講演後のラムパンチ・レセプションでも長いことお話をさせていただき再会を誓った。マッケイ文学を環カリブの枠組みに再配置するという興味深い提案をされたジャック・ピーク氏は、その枠組みのなかでは『バンジョー』(Banjo, A Story without a Plot, 1929) や他の小説はどのような位置付けになるか、という私の質問に対して真摯に回答してくださった。その後、ピークさんと世間話をしていると、思いもよらず彼がヒューム教授のお弟子さんでもあることが分かった。ピークさんは私がファンだと知ると、ヒューム先生とツーショット写真を撮ってくださいと言う。舞い上がった私は、右手をおずおずと差し出しながら「日本ではカリブ文学やポストコロニアル研究であなたを知らない人はいません！」とまぬけなことを口走って笑われてしまったが、ヒューム先生の右手はとても大きく、とても温かかった。

エルバート・ランソム Jr.氏講演会レポート

阿津坂 祐貴

2014年2月7日、黒人歴史月間のイベントとして開かれた講演会「歴史と向き合う～アフリカ系アメリカ人の軌跡をたどって～」(於立命館大学梅田キャンパス/主催関西アメリカン・センター、共催黒人研究会)に参加した。今年のゲストは、エルバート・ランソム Jr.氏(牧師/博士)。この日は、17歳のころに若きマーティン・ルーサー・キング Jr.氏と出会い、モンゴメリーでのバスボイコット運動をはじめとする一連の公民権運動に携わった経験から、黒人史と自由へのたたかいについて伝えてくれた。

ランソム氏は、ミシシッピ州ジャクソン市で生を受け、今年で77歳。1950年代半ば、建設や造船業をへて自営業を営む父のもと、高校で音楽の才能を開花させ、4つの(黒人)大学から奨学金のオファーを得る。7月にアラバマ州の大学へと進学したところ、声楽のコーチから「ちょうど4月にモアハウス時代の同僚がこっちに来ている」から、と紹介されたのが、モンゴメリーに牧師として赴任したばかりのキング氏であった。1950年代の隔離の時代——「ユーモアのセンスがないと乗り切れない時代」に出会った二人は、すぐにうちとけ、家族のようになった、という。1955年からは、キング氏とともに、バスボイコット運動、シカゴ自由運動へとかかわり、現在は、アメリカで人種と文化を越えた相互理解を育む団体REACHの会長を務めている。

講演の内容は大きく二部に分かれていた。前半は、1619年から1954年までについて。ジェームズタウンにアフリカ大陸から売られてきた20人の「黒人」の上陸から、1950年代のジム・クロウまでである。後半は、それ以降のランソム氏のパーソナルな体験といった構成であった。内容については、キング氏の著作『自由への大いなる歩み』(岩波新書、1959年)のそれと同様のものであった。(つまり、1955年12月1日、クリーヴランド・アヴェニュー・バス69番の利用をめぐるローザ・パークス氏が逮捕され、この事件を契機に、地元指導者の間で「運動」が計画された。「一度きり」を条件にキング氏がスポークスマンを引き受けたが、一日のバスボイコットの成功の結果、一年におよぶボイコット運動がはじまった、というものである)。

講演の中でランソム氏が強調していたのは、次の二点であった。ひとつに、奴隷制と人種主義は、肌の色に由来する差別や偏見のみならず、ビジネスという動力があってこそ成立し、存続するものであるということ。そしてこの「人間」の資本への強欲さが、ヨーロッパ人とアフリカ人をして、奴隷制を生み出し、人間の非人間化を促進したものだということである。この強欲さにより、黒人は無知で、導きを欲する状態で生きることを望まれたわけであるが、ただそれは人間の自然な欲望—自由—を葬り去ることはできなかった。この自由を求めるといふ観念は、時代を越えて受け継がれてきたのである。そして、もうひとつの強調点は、まさにこの点、つまり「人は殺せる、でも(その内にある)観念は殺せない」であった。決め台詞として何度か使われたこの言葉は、1619年の20人の黒人の、1955年のパークス氏の、そして公民権運動をともにたたかった「多くの善良な白人の人々」の意志のつながりを説明する。皮肉なことは、同じ言葉が、ランソム氏のたたかう相手にもいえるということであった。「奴隷解放宣言はなされるべきでなかったといまだに考えるダイ・ハード」な勢力も存在する、とランソム氏は語った。自由の希求が減びないのと同じ理屈で、人種差別

主義的な人や制度は殺せても、観念は殺せないからである。

しかし、ランソム氏がいうように、彼やキング氏、そして黒人歴史月間に語られることのない多くの黒人の観念は、これからも死することはないだろう。しかし、殺されないということは必ずしも強く生きていけるということの意味しない。したがって、多くの自由を求める人々が受け継いできた観念が、強く生きつづけるためには、それをまた現代、次世代の人々が発掘し、受容し、理解し、解釈を加え、それを新たなアクションへとつなげていく必要があるだろう。そしてこの日の講演を含むランソム氏の地道な活動は、彼の言葉でいえば、いずれもわたしたちに箱の中に入れてしまわれている「歴史」を箱から取り出すように促すものであるようだ。観念があの世界へと消えていくことはない。しかし、それを幽霊のように彷徨わせてはならない。

入 会 者

カーブ・オリバー・ベンジャミン氏

所属：テンプル大学現代アジア研究所

自己紹介：私はニューヨーク州ニューヨーク市で生まれ、フィラデルフィアで育ちました。ボルチモアのガウチャー大学で歴史学と英文学を専攻。その後イェール大学大学院でアフリカ系アメリカ人の歴史を研究。2002年に初めて日本に来ました。現在、現代アジア研究所の特別研究員です。

アフリカ系アメリカ人の思想史に興味があります。修士課程の時に、アメリカ南北戦争時代に奴隷たちが働いていたプランテーションにおいて、「出エジプト」という観念が、自分たちのアイデンティティを確立するためだけでなく、自分たちが新しい歴史や明るい未来を作り上げることに参加しているという感覚をもつための道具として使われたということについて論文を書きました。

アフリカ系アメリカ人の思想やその歴史を再構築することだけにとどまらず、彼らの思想史が、単に世界から分離され、孤立した集団の話ではなく、むしろ普遍的な思想の中の1つとして評価されるべきだという考えを持って研究を行っております。

博士論文では、アフリカ系アメリカ人側と日本の双方において、1905-1941の国粋主義的時代、世界的近代化時代、そして日本が力を持ち始めた時代に、思想家たちが交わしたやりとりの結果、どのように「レース(人種)」という概念が構築されていったのかということを知りたいと思っています。

加藤（磯野）順子（かとう いその じゅんこ）氏

所属：日本大学&早稲田大学 非常勤講師

自己紹介：私は、コロンビア大学の修士課程において20世紀初頭の米国女性労働史を、博士課程では南北戦争前後の米国政治・労働史をバーバラ・フィールズ教授とエリック・フォーナー教授の下に学びました。二つの学位の間には帰国し、東京の米国大使館に勤務しましたので、日本人としてアメリカを学生と政府職員の立場で観察しました。19世紀のアメリカに最も惹かれますが、学生には、学問以外に私が体験した現在のアメリカも伝えるよう心がけております。どうぞ宜しくお願いいたします。

安澤 梨花（あんざわ りか）氏

所属：津田塾大学 非常勤講師

自己紹介：Toni Morrison を中心に、20 世紀～現代のアフリカン・アメリカン文学を研究対象としております。現在アフリカン・アメリカン文学、大衆文化における自己表象、そして親密圏の可能性というテーマに興味を持っております。留学中に黒人に関する映像作品を集めたアーカイブスで研究員をしたことから、今後は映像作品も含めたかたちでこの研究テーマを追求していきたいと考えております。黒人研究の会は大学院生時代、何度か参加させていただき多くの刺激を受けました。御学会で様々な学びを共有していきたいと思っております。よろしく願いいたします。

山本 愛（やまもと あい）氏

職業：ゴスペルシンガー、音楽講師

自己紹介：黒人のゴスペルを 15 年間歌っています。小さな教会のクラスで習い始め同時に自分のコーラスを立ち上げ、主に 19 世紀から 20 世紀初頭のルーツゴスペルを専門に歌っています。奴隷制度の名残も残るニグロスピリチュアルのエネルギーに人間の持つ普遍的な生命力を感じ、歌うたびに魂が揺さぶられます。歌うだけで、そのグルーブ（うねり）と神へのそこはかとなない信仰の深さにも触れることが出来ます。アフリカ人であったアメリカ黒人達の苦悩と葛藤と乗り越える強さに、私たち現代人が得るものは大きいのではないのでしょうか？ルーツの Bluse や Funk や Gospel や Regaea のお話が皆さんと出来たら幸いです。

（順不同）

＜編集＞ 黒人研究の会・編集部
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学国際関係学部・加藤恒彦研究室気付

＜編集者＞ 井上 怜美

ホーム・ページアドレス
<http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/>